『ペスト』の「オトン氏の息子」について

松　本　陽　正

1

『ペスト』読了直後の読者に、「オトン氏の息子」（p.1391）とは誰か、と尋ねれば、ペストの犠牲となる子供だとの答えがかえってこよう。それほどこのエピソードは、作品の「最も重要な場面[1]」を構成し、読者の心に強烈な印象を残すのだが、同じ読者に「オトン氏の息子」の名前は、と問うても、おそらく答えはかえってはこないだろう。実際には「オトン氏の息子」には「フィリップ」という名前があるのだが、極めて巧みな無名化がなされているからである。それでは、いかにして、そしてまたいかなる理由で彼は無名化されているのだろうか。

作品中で、名前への言及は、生前に一度、そして死後に一度なされるだけである。子供の死後、オトン氏はタルーとランベールに「フィリップはそうひどく苦しみはしなかったでしょうな」（p.1417）と言うのだが、犠牲者となる子供の名前を、生前記憶しているには、極めて注意深い読書が必要とされてくる。第Ⅰ部での「オトン氏の息子」への言及のある箇所をたどりながら、そのことを具体的にみることから始めたい。

『ペスト』Ⅰ部2章[2]には、リウー、喘息病みの爺さん、ランベール、タルー、リウーの母、パヌルー神父、グラン、コタールといった、後に作品世界を彩ることになる主要登場人物たちがほとんどすべて紹介されているが、オトン氏とその息子も例外ではない。リウーが駅で妻を見送った直後の場面に、彼らも登場してくるのである。その場面を引用しておこう。

〔引用Ⅰ〕

Près de la sortie, sur le quai de la gare, Rieux heurta M. Othon, le juge d'instruction, qui tenait son petit garçon par la main. Le docteur lui demanda s'il partait en voyage. M. Othon, *long et noir,* et qui ressemblait moitié à ce qu'on appelait autrefois un homme du monde, moitié à un croque-mort, répondit d'une voix aimable, mais brève:

《J'attends Mme Othon qui est allée présenter ses respects à ma famille.》

La locomotive siffla.

《Les rats...》, dit le juge.

Rieux eut un mouvement dans la direction du train, mais se retourna vers la sortie.

《Oui, dit-il, ce n'est rien.》

Tout ce qu'il retint de ce moment fut le passage d'un homme d'équipe qui portait sous le bras une caisse pleine de rats morts. (p.1226, 強調引用者)

ここでは、オトン氏については、その名が知らされ、職業（「予審判事」）、身体的特徴（「長身で黒い服を着た」long et noir[3]）、個性ある喋り口が簡単に紹介されてはいるが、それに対し「オトン氏の息子」は、オトン氏に手をひかれた「小さな男の子」son petit garçonと提示されているにすぎず、もちろん名前はあげられてはいない点に着目しておきたい。

次に登場するのはⅠ部3章であるが、それは〔引用Ⅰ〕のように語り手リウーの記述の中ではなく、「タルーの手帳」にでてくるものである。ここで初めて名前が明らかにされるのだが、まず、その件をあげておこう。

〔引用Ⅱ〕

Au restaurant de l'hôtel, il y a toute une famille bien intéressante. Le père est *un grand homme maigre, habillé de noir,* avec un col dur. Il a le

milieu du crâne chauve et deux touffes de cheveux gris, à droite et à gauche. Des petits yeux ronds et durs, un nez mince, une bouche horizontale, lui donnent l'air d'une chouette bien élevée. Il arrive toujours le premier à la porte du restaurant, s'efface, laisse passer sa femme, menue comme une souris noire, et entre alors avec, sur les talons, un petit garçon et une petite fille habillés comme des chiens savants. Arrivé à sa table, il attend que sa femme ait pris place, s'assied, et les deux caniches peuvent enfin se percher sur leurs chaises. Il dit 〈vous〉 à sa femme et à ses enfants, débite des méchancetés polies à la première et des paroles définitives aux héritiers:

— Nicole, vous vous montrez souverainement antipathique!

Et la petite fille est prête à pleurer. C'est ce qu'il faut.

Ce matin, le petit garçon était tout excité par l'histoire des rats. Il a voulu dire un mot à table:

— On ne parle pas de rats à table, Philippe. Je vous interdis à l'avenir de prononcer ce mot.

— Votre père a raison, a dit la souris noire.

Les deux caniches ont piqué le nez dans leur pâtée et la chouette a remercié d'un signe de tête qui n'en disait pas long.

(pp.1238-1239, 強調引用者)

「タルーの手帳」はⅠ部3章以降、リウーの「記録」chronique (p. 1222) の中に散りばめられて導入されてくるが、この「手帳」の特性について、語り手リウーは、この章の始めで、「これまた、この困難な期間の一種の記録となるものである」が「しかし、この記録たるや、かまえて些末事ばかりをとりあげる方針に従ったと思われる、きわめて特殊な記録」であって、「第二義的な無数の些事」une foule de détails secondaires (p. 1236) を提供するものであると説明をくわえている。事実、〔引用Ⅱ〕の前には、タルーが耳にした

「二人の電車の車掌の問答」（p. 1236）や「時間を無駄にせぬためにはいかにすべきか」（p. 1237）といった省察が記されている。もちろん、それと同時に以後も「タルーの手帳」に出てくる、猫に唾を吐きかける小柄な老人もそこには描かれてはいるものの、〔引用Ⅱ〕はタルーの投宿するホテルに食事をとりにやってくる家族の単なるスケッチとして、作品世界に以後登場することのない一家族のスケッチとして読み過ごされてしまうことだろう。

のみならず、ここではこの家族の名前が問題にされていない点は着目しておく必要があろう。親の名は明かされてはいない。二人の子供の名がそれぞれ「ニコール」「フィリップ」だと知らされるが、それらの名はいかなる姓にも結びつけられてはいない。ここで子供たちの名が告げられているとしても、食卓で親が子供の名を呼び、注意するのはあたりまえのことであり、二人の子供の名は読者の脳裏からすぐに消えていくことだろう[4]。もし、この家族の肖像が読者の記憶に残るとしても、それは子供たちの名前によってではなく、主人は「育ちのいい梟」に、妻は「黒い二十日鼠」に、そして子供たちは「学者犬」や「プードル」にといったように、家族の者すべてを動物にたとえた比喩によってであろう。

〔引用Ⅱ〕の主人は実はオトン氏であり、「フィリップ」が「オトン氏の息子」に他ならないのだが、この段階でそのことに気付くのはまず不可能であろう。もっとも、指標が皆無というわけではない。〔引用Ⅰ〕のオトン氏と〔引用Ⅱ〕の主人の体型と服装がそれである。ただそれとても、〔引用Ⅰ〕は語り手リウーの記述であり、〔引用Ⅱ〕は「タルーの手帳」からの引用である以上、同じ表現ではない。すなわち、イタリック体で示したように、〔引用Ⅰ〕では「長身で黒い服を着た」long et noirとなっているのに対し、〔引用Ⅱ〕では「やせた背の高い男で、黒い服を着」un grand homme maigre, habillé de noirとされているのである[5]。また〔引用Ⅰ〕でオトン氏は「予審判事」と紹介されていたが、〔引用Ⅱ〕の「黒い服を着、堅いカラー」をつけた主人は法曹界の人間を思わせる。さらに指標らしきものを捜せば、〔引用Ⅰ〕のオトン氏と〔引用Ⅱ〕の主人との双方に共通する勿体ぶった口調だろうか。しかし、いずれも決定的なものとはなるまい。のみならず、〔引用Ⅰ〕と〔引用Ⅱ〕

は章によって隔てられており、また〔引用Ⅰ〕ではオトン氏とその息子二人しか描かれていなかったのに対し、〔引用Ⅱ〕では四人の家族の姿が描かれていて、数の上でも一致しない。体型や服装や口調といったこれらの指標は、後で振り返って初めて結びつくものであって、初めて読むときには、〔引用Ⅰ〕と〔引用Ⅱ〕が同一家族であると特定することはまず不可能であろう。こうして、「フィリップ」は「オトン」には結びつかず、「オトン氏の息子」は巧みに無名化されているのである。

それではどこで〔引用Ⅰ〕と〔引用Ⅱ〕が同一家族であることがわかるのだろうか。それはかなり後、Ⅰ部8章、つまりペストによる市の閉鎖が宣言されるⅠ部最終章の最終パラグラフになってのことであるが、それに気付くにはこれまたかなり入念な読書が要求されることになる。そのパラグラフの一部を引用し、説明をくわえたい。

〔引用Ⅲ〕

Apparemment, rien n'était changé. Les tramways étaient toujours pleins aux heures de pointe, vides et sales dans la journée. Tarrou observait le petit vieux et le petit vieux crachait sur les chats. Grand rentrait tous les soirs chez lui pour son mystérieux travail. Cottard tournait en rond et *M. Othon, le juge d'instruction, conduisait toujours sa ménagerie.* Le vieil asthmatique transvasait ses pois et l'on rencontrait parfois le journaliste Rambert, l'air tranquille et intéressé. Le soir, la même foule emplissait les rues et les queues s'allongeaient devant les cinémas.　(p.1269, 強調引用者)

「何ひとつ変ったものはなかった」、その例としてここには何人かの作中人物たちの行動が列挙されている。彼らのうち、タルー、グラン、コタール、喘息病みの爺さんについてはそれまでにすでに何度か触れられており、読者は容易にその姿を思い浮かべることができよう。また、猫に唾を吐きかける小柄な老人は、3章の「タルーの手帳」にでているだけだったが、それでも例外的に

三度紹介されていたし、なによりも、そのエピソードの特異さから、読者に鮮烈な印象を残しているはずである。残る二人の作中人物、つまりオトン氏とランベールの名を記憶しているにはかなり綿密な読書が必要となろう。というのも、彼らの名が知らされていたのは、わずかに一度、Ⅰ部2章においてであり、最終章とはかなりのページ数によって隔てられているからである。彼ら二人の職業（「予審判事」と「新聞記者」）が繰り返しのべられているのは、読者の記憶を喚起するためだろう。こうして、Ⅰ部2章で紹介されていたオトン氏とランベールを想起したとしても、オトン氏に関しては、ここで言われている、「予審判事のオトン氏は相変わらず動物園のような一団を連れて歩いていた」は何のことかよくわからないのではなかろうか。「動物園のような一団」が何かを理解するためには〔引用Ⅱ〕の家族を記憶していなければならないのである。繰り返すが、〔引用Ⅱ〕は「些事」を記した「タルーの手帳」からの借用であり、街中で鼠の死が話題になっていた時期に、タルーの泊まるホテルに食事をとりにくる一家の単なるスケッチとして読み過ごされかねない性質のものだった。〔引用Ⅱ〕では、主人は「育ちのいい梟」に、妻は「黒い二十日鼠」に、そして子供たちは「学者犬」や「プードル」にたとえられていたこと、これを記憶していて初めて〔引用Ⅲ〕のイタリック体の部分の読解が可能になり、〔引用Ⅱ〕の家族はオトン氏一家に他ならなかったことが理解されてくるのである。

ただ、そうなっても、すでにみたように、〔引用Ⅱ〕の家族は、名前ではなく動物への比喩によって読者の記憶に残されていた以上、「オトン氏の息子」の名が「フィリップ」だということは、読者の脳裏から消えてしまっていることだろう。「オトン氏の息子」の名を記憶にとどめようとすれば、〔引用Ⅱ〕まで再びかえってみなくてはならないだろう。かくして「オトン氏の息子」は巧妙に無名化されているのである。

2

Ⅳ部3章でペストの犠牲となるまで、「オトン氏の息子」への言及は何度か

なされているが、一度も「子供」enfantとは呼ばれていない事実には注目する必要があろう。〔引用Ⅰ〕では「小さな男の子」son petit garçon、〔引用Ⅱ〕でも「小さな男の子」un petit garçon, le petit garçonとなっていたが、これ以降も「小さな男の子」le petit garçon（p. 1314）「オトン氏の小さな男の子」le petit garçon de M. Othon（p. 1375）と言ったように、「男の子」petit garçonと呼ばれ、決して「子供」とは呼ばれてはいないのである[6]。それに対し、彼の死が描かれたⅣ部3章では、初めて彼は「子供」と呼ばれ、この言葉が多用されてくるのである。

「子供」enfantという言葉の作品中での使用は実に巧みである。『ペスト』の中で、この言葉は単数形では全部で37回使われているのだが[7]、Ⅳ部2章までのこの言葉の使用例はわずか3例にすぎない。しかもそれらはすべて、Ⅰ部最終章、ペストの影に怯えるリウーに微笑みかけ、そしてリウーが微笑みかえす、リウーが市中で出会った子供を指すものに限定されていて、犠牲者となる子供を示すことはなかったのである。こうして故意に抑制されていたこの言葉は、「オトン氏の息子」の死を描いたⅣ部3章になると、プレイヤッド版でわずか8ページの間に、作品中での全使用例のおよそ7割にあたる25回も「オトン氏の息子」に対し用いられることとなる[8]。カミュが意識的にこの言葉を使ったことは明らかであろう。こうして、きわめて意図的に、集中的にこの章に用いられた「子供」という言葉によって、すでに無名化されていた「オトン氏の息子」の個別性は完全に消失し、今度は「男の子」という性も捨象され、「オトン氏の息子」は完全に中性化された存在となる。そして、「無垢」と結びつき、無垢な犠牲者、「無垢な子供」の象徴にまで高められるのである。その例をあげておこう。

Ils avaient déjà vu mourir *des enfants* puisque la terreur, depuis des mois, ne choisissait pas, mais ils n'avaient jamais encore suivi leurs souffrances minute après minute, comme ils le faisaient depuis le matin. Et, bien entendu, la douleur infligée à *ces innocents* n'avait jamais cessé de

leur paraître ce qu'elle était en vérité, c'est-à-dire un scandale. Mais jusque-là du moins, ils se scandalisaient abstraitement, en quelque sorte, parce qu'ils n'avaient jamais regardé en face, si longuement, l'agonie d'*un innocent*.
(p.1394, 強調引用者)

そして、子供の死の直後、「反抗」にかられたリウーはパヌルーに向かって、激しく、怒りをこめて、次の言葉を投げつけ、子供が「無垢」だったことを主張するのである。

《Ah! celui-là, au moins, était *innocent*, vous le savez bien!》
(p.1396, 強調引用者)

さらに注目すべきは、「オトン氏の息子」は「子供」enfantという個から、さらには「子供たち」enfantsという一般概念へ拡大されていることである。ペストの犠牲となる「オトン氏の息子」がこうして一般化され、総称化されることによって、ペストは、流行病でもナチズムの象徴でもなく、この世の悪の象徴となり、「オトン氏の息子」の苦悶は「子供たち」の苦しみに普遍化され、無垢なる者たちを死に追いやる、この世界の悪の告発となってくるのである。リウーの言葉を続けよう。

《(...) Et je refuserai jusqu'à la mort d'aimer cette création où *des enfants* sont torturés.》
(p.1397, 強調引用者)

こうして、『ペスト』において、カミュの作品群の中で初めて、無垢な子供像が示されることとなったのである。

ところで、すでに述べたように、「オトン氏の息子」の名は、死後、Ⅳ部5章でもう一度我々読者に知らされることになる。タルーとランベールに向かっ

て、オトン氏が次のように言う件がそれである。

《J'espère, dit le juge après un certain temps, que Philippe n'aura pas trop souffert.》

C'était la première fois que Tarrou lui entendait prononcer le nom de son fils et il comprit que quelque chose était changé.　(p.1417)

しかしながら、すでにⅣ部3章で完全に無名化され、「無垢な子供」の象徴となっていた以上、死後、オトン氏から子供の名を知らされた時には、父親であるオトン氏はともかく、我々読者には「フィリップ」という名前はもはや個別性をもたず、その名はもう何の意味ももたなくなっているのである。

ところで、上記引用文中に「タルーは、オトン氏が自分の息子の名前を口にするのを聞いたのはこれが初めてであり」とあるが、はたしてそうだっただろうか。〔引用Ⅱ〕を思い起こしていただきたい。「食事中に鼠のことなんか話すんじゃありません、フィリップ」と子供に注意していたのは、他ならぬオトン氏ではなかったか。〔引用Ⅱ〕の段階では、タルーはオトン氏の名を知らず、ある一家の食事の情景を単にスケッチしたにすぎなかったのであり、「フィリップ」という名前を「手帳」に書き留めたタルー自身ですら「オトン氏が自分の息子の名前を口にするのを聞いた」ことを失念しているのである。実に巧妙な無名化と言わねばなるまい。

3

それではなぜ「オトン氏の息子」には「フィリップ」という名前がついているのだろうか。そこにはいくつかの理由があろう。まず考えられるのは、すでにみたように〔引用Ⅰ〕〔引用Ⅱ〕〔引用Ⅲ〕の照応を読み取り、いかなる細部もおろそかにせぬ入念な読書を我々読者に求めたことがあげられよう[9]。また、大作『ペスト』は、「ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、数十年の間、家具や下着類のなかに眠りつつ生存することができ、

部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古のなかに、辛抱強く待ち続けていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストが再びその鼠どもを、呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろう」（p.1474）との警告で終っているのであり、そしてまた事件終了後に「医師リウーはここで終りを告げるこの物語を書きつづろうと決心し」（p.1473）、この「記録」をしたためたという体裁をとっている。すなわち、作品はある種の円環構造をとっているのであって、読者を再読へと誘っているのである。「オトン氏の息子」の無名化の操作もまた再読によって初めて明らかになる性質のものであろう。このように、我々読者に入念な読書をあるいは再読を求めたこともむろんあろうが、しかしながら、「オトン氏の息子」に名前のある最大の理由は、ペストの犠牲者となる子供に、命名による実在性をもたせるためであったろう。完全に無名の、抽象化された存在の死なら、「ペスト」という悪を告発することはできなかったはずだからである。

逆に、「無垢な子供」の象徴とするには、実在性がぼかされる必要性が、無名化のための巧みな操作の必要性があったのである。「実在」と「象徴」というこの相矛盾する困難な芸術的要請を満たすことによって、カミュは「オトン氏の息子」を「無垢な子供」の象徴とすることに成功したのである。

注

プレイヤッド版によるアルベール・カミュの作品を次のように略記する。

Pl. : *Théâtre, Récits, Nouvelles*, Gallimard, 1962, dépôt légal 1967.

なお、『ペスト』*La Peste*からの引用については直接ページを示したが、それらはすべてPl.のページをさしている。また、邦訳は宮崎嶺雄訳を参照したことをお断りしておく。

1）Pol Gaillard, *La Peste Camus*, 《Profil d'une œuvre》, Hatier, 1978, p.37.

2）『ペスト』は五部よりなっているが、厳密に言えば「章」に分かれているわけではない。本稿では便宜上、章番号を打って，説明をくわえることとする。

3）noirが、髪の色なのか、肌の色なのか、服の色なのか、何をさすのかこれだけでは

特定できないが、後にあげる〔引用Ⅱ〕の「黒い服を着」habillé de noirという言及および「オトン氏は相変らずいつものとおりの服装をし、いつもと同じ堅いカラーをつけていた」(p. 1416)や「姉と同じように黒い服を着、以前より少しかがまり気味になったところは、その父親の小さな影法師のように見えた」(p. 1314)との記述から、このnoirは「黒い服を着た」ととらえるべきだろう。〔引用Ⅱ〕の主人が「灰色の髪の毛」cheveux grisとなっている点も、このnoirを髪の色とはとれぬ根拠の一つとなろう。

4)「二人の電車の車掌の問答」で話題になるのは、ペストで死んだキャンなる男であるが、名前が紹介されているとはいえ、もちろん以後登場することはない。そうした点からも、「ニコール」と「フィリップ」も、この段階では,「キャン」同様,読者に意味をもつことはないであろう。

5)もっとも、注3)でみたように、noirが服の色をさすと特定可能になるのは、かなり先の記述との照応によってである。

6)姉と一緒に、「(彼の)子供たち」ses enfantsと複数形で呼ばれている箇所はみつかる。p. 1239 および p. 1314参照。

7) Manfred Sprissler, *Albert Camus Konkordanz zu den Romanen und Erzählungen*, Band I, Georg Olms, 1988, p. 609. ちなみに、複数形は全部で15回使われていて、この章では、後にみるように二度、きわめて効果的に用いられている。

8)逆に、「オトン氏の息子」le fils de M. Othon(p. 1391)、「少年」petit garçon (p. 1393)、「小さな患者」le petit malade (p. 1393)、「病人」le malade (p. 1394)といった言葉はそれぞれ一度、「小さな体」petit corps (p. 1392, p. 1393)が二度使われているにすぎない。さらに補足すれば、子供の死を直視した後、パヌルーが行う説教を描いた次章(Ⅳ部4章)でも、「子供」という言葉は、単数形で8回、複数形で4回も用いられることとなる。

9)『異邦人』の第Ⅱ部における「小柄な機械人形」の再登場の理由の一つも、読者に入念な読書をうながすことにあった。詳しくは、拙稿、「『異邦人』の<小柄な機械人形>について」(広島女学院大学論集　通巻37集、1987)を参照されたい。

Sur 《le fils de M. Othon》 de *La Peste*

Yosei MATSUMOTO

La mort du 《fils de M. Othon》 constitue l'épisode central de *La Peste*. Mais, chose curieuse, son vrai nom est habilement dissimulé dans cette chronique quoiqu'il ait eu réellement un nom, Philippe. Comment et pourquoi Camus veut-il lui garder l' anonymat?

Le nom n'est mentionné que deux fois, une fois de son vivant et une autre après sa mort. Jusqu' à sa mort il est pratiquement impossible de savoir de qui il s'agit. La première mention se rencontre dans la troisième séquence de la première partie, dans 《les carnets de Tarrou》 où Tarrou note la conversation d'une famille encore inconnue qui est venue prendre un repas dans l'hôtel où celui-ci descend. Pour arriver à savoir que le père de cette famille n'est autre que ce M. Othon que le narrateur a brièvement présenté dans la séquence précédente, une lecture approfondie s'impose; il faut se rendre compte, pour les deux descriptions que sépare la séquence, que les indices concernant le physique et l'habillement de M. Othon coïncident. De cette façon, l'anonymat est conservé avec beaucoup d'habileté et de maîtrise.

Il faut remarquer d'ailleurs que 《le fils de M. Othon》 n'est jamais appelé 《enfant》 mais 《petit garçon》. Par contre, dans la scène de sa mort, il est appelé pour la première fois 《enfant》 et ce mot revient fréquemment. Il est remarquable que le mot *enfant* apparaisse vingt-cinq fois dans cette séquence; ce qui constitue à peu

près soixante-dix pour cent de l'ensemble des emplois du mot dans l'ouvrage. La fréquence du mot *enfant* enlève au 《fils de M. Othon》 non seulement toute individualité mais aussi toute détermination de sexe; elle l'élève au rang de victime innocente, autrement dit, il devient le symbole de l'enfant innocent.

Par conséquent, quand M. Othon prononce incidemment le nom de son fils après sa mort, 《le fils de M. Othon》 étant devenu pour nous un être anonyme et le symbole de l'enfant innocent, ce nom 《Philippe》 n'a plus de raison d'être.

Pourquoi alors avoir attribué ce nom de Philippe au 《fils de M. Othon》? On pourrait imaginer plusieurs raisons dont la première serait de lui conférer une réalité. Cependant pour faire d'un être vivant le symbole de l'enfant innocent, il a fallu au contraire que sa réalité s'efface et qu'il devienne anonyme. C'est en voulant répondre à cette exigence sévère de la création artistique que Camus a réussi à donner corps à l'image de l'enfant innocent.